

経済志向を映す住居 —ラオスの場合—

ケオラ・スツクニラン

住居は、人間生活の基礎を成す衣食住のひとつ。しかし、世界中の住居は千態万状である。その大きな理由のひとつは、自然環境に対応した結果であろう。東日本大震災で、激しく揺れても倒れない日本の高層建築物や、川が氾濫しても住居の機能を失わないラオスの高床式住宅が、これにあたる。しかし、自然環境だけで説明できない違いもある。それどころが、筆者が約二〇年前まで住んでいたラオスの首都であるビエンチャンでは、雨が降れば膝下まで水に浸かり、また、毎年メコン川氾濫の危険性に直面する市街地の岸沿いの住宅が平床式である一方、川が氾濫してもほとんど影響を受けない高台に高床式が多くみられるという、一見、理に反する現象があった。

ところが、よく観察をすれば、この二つ地域に好んで住む人の間には、選択する職業など経済的な営

みにおいて、明らかな違いもみえてくる。すなわち、経済志向の違いである。市街地のメコン川沿いに平床式を構えるのは、小売店、飲食店などを営む人が多い。一方、コメ作りなどを行っている農家は高台に住んでいても、高床式の住居を好むのである。以下、ラオスを事例に、経済志向とその変化が、どのように人々の住宅事情に影響を及ぼしているかを考察してみよう。

●一軒家を好むラオス人と ホーン・テアウ(長屋)を 好む外国人

ラオスでもっとも一般的な住居は、二つある。ひとつは、大小の違いはあるにせよ、家庭菜園のできる庭がある一軒家である。特に何も断りがない場合、ラオスでは、家とはこの一軒家を指す。もうひとつは、ホーン・テアウである。直訳すれば、屋(ホーン)列(テ

アウ)となる。通りに面した長屋である。ほとんどの場合、人通りの多い道路に面し、また側面の壁は隣の家と共有しているのが、ラオスの長屋の特徴である。ラオスに住む人々は、住居としていづれかを選択することになる。近年まで続いた一般的に知られる傾向として、ラオ族をはじめとするラオス人が一軒家を好む一方、数少ない欧米人などを除き、現地に長く滞在するベトナム系や中国系の外国人・ラオス人は長屋を選ぶ。なぜ、狭いうえポロポロな長屋に、一軒家に匹敵、あるいはそれ以上のお金を払い、購入または賃貸するのか? 少年時代の筆者にとつて、不思議に思ったことのひとつだった。

観察するにつれ、経済志向の違いこそが、その主要な理由と筆者は考えるようになった。二〇〇〇年代に入ってから、その違いがは

きりしなくなってきたとはいえず、ラオスでは、民族による職業選択や経済活動の違いが、以前から大きい。一九世紀末から始まったフランスによる植民地期のラオスでは、公務員のベトナム系とメコン川を挟んで商業に従事する中国系に対し、ほとんどのラオス人は自給自足の農業に従事していた(Astew et al. 2007)。現体制が成立した一九七五年以降は、公務員のほとんどがラオス人になったものの、生活していくのに十分、またはそれに近い給与がもらえるようになったのは、この数年前からの話である。「自然経済」から「商品経済」への転換が、現に国家開発のスローガンになっていること



一軒家と長屋(筆者撮影)

が、何よりの明確な根拠である。ここでいう「自然経済」と「商品経済」が、経済学でいう「自給自足経済」と「市場経済」であるのは、いうまでもないことである。社会主義思想を国是とする体制が成立する一九七五年以前を含め、市場経済進展しなかった大きな要因はいつくか考えられる。そのもつとも大きなものは、一八世紀末（一八九三）からフランスによる段階的な植民地化が始まるまで、隣国の強制移住による継続かつ徹底的な人口希薄化政策であった(Stuart-Fox [1997])。フランスが仏印に併合したラオスは広さが日本の本州とほぼ同じ面積であったが、一九一〇年になつても約六〇万人しかいなかったと言われている(Petrantoni [1953])。これが、経済活動にとつても過少な規模であることは、植民地化した直後のフランス人高官などがメコン川西岸でラオス人の帰還を呼び掛けたことからもうかがえる(Askew et al. [2007])。

筆者が少年時代を過ごした一九八〇年代までの首都には、大小の違ひこそあるものの、表・裏庭のある一軒家に住むラオス人が多かった。農家にとつての自給自足な生活はもちろんのこと、公務員など給与所得のある家庭でも、自宅でバナナ、タマリンド、マンゴといった果物や野菜がとれることは珍しくなかった。というよりも、むしろ当たり前であった。また、停電、断水になつても生活が出来るよう、薪を使ったコンロや、雨水を貯める大きな壺またはその代用品があつた。高校生になるまで、木屑コンロを準備するのが役目であつた日々が懐かしく思い出される。これに対し、ラオスの小規模かつ、数少ない都市部で生活するベトナム系や中国系の外国人、またはラオス人は商業などを、自分たちが住んでいるところで営むことが多い。例えば、首都では、昔からメコン川沿いの市街地などを中心に、人々は小売店、飲食店、仕立て屋・クリーニング屋、手作業でバイクや車の簡単な部品を作る店など家族経営で営んでいる。商売により現金を稼ぎ、そのお金で必要な消費財を購入する彼らにとって、何よりも大切なことは、人通りの多いところに立地するということであろう。こう考えれば、高いお金を払つてまで、窮屈な長屋を好む彼らの行動も納得できる。

●長屋に参入するラオス人

近年、ラオスの首都や地方都市

を車で走ると、以前とはつきりと違う光景のひとつが目につく。単独、または数戸しかない長屋が、町の中心部や人通りが格段に多いと言えない道路沿いにも多くみられるようになったことである。なかには、道路沿いの狭いスペースで半ば無理やり建てたようなものもある。「ラオス人もこういうのに、住むようになったのか？」と何気なく運転手や知り合いに尋ねると、「ビジネスを始めるため道路沿いに狭い長屋を選ぶラオス人が増えている」という。確かに、ラオス特に首都ビエンチャンは、二〇〇〇年代に入つて大きく変貌している。一九四三年に約二万三〇〇〇人だつた首都の人口は、一九八五年に三万八千、一九九五年に五万三千、そして、二〇〇九年に七万五千人にまで増加し、県別平均人口密度が約三三人/平方キロメートルのラオスで、唯一約二〇〇人/平方キロメートルに達している。さらに、より細かい統計によれば、首都ビエンチャンは、唯一、一平方キロメートルに二〇〇〇人以上の人口密度の郡が存在する行政区である(ラオス国家統計局²⁾)。これは、周辺諸国ほどではないものの、ラオスでも首都における都市化が進んでいる証拠とい

える。ラオス人も長屋に住むようになった理由として、都市化に伴う混雑が一因であることは明らかだが、本質は、ラオス人の生計の立て方の変化にあると筆者は考える。自給自足から貨幣経済への転換に伴い、広いスペースよりも、人が集まり現金収入の機会の大きさが優先されるようになったのである。

(Keola Soukriah/アジア経済研究所 経済統合研究グループ)

(注)

- (1)一九八五年以前の人口センサスでの首都人口は、分離される前のビエンチャン県の人口を含む。
- (2)ラオス国家統計局ホームページ
<http://www.nsc.gov.la/>

《参考文献》

- Askew, Marc, William Stewart Logan and Colin Long [2007] *Vientiane: transformations of a Lao landscape*. Oxford: Routledge.
- Petrantoni, Eric [1953] *La population du Laos de 1912 à 1945*. BSEI, Nouvelle Série, Tome XXXVIII (1953).
- Stuart-Fox, Martin [1995] "The French in Laos, 1887-1945", *Modern Asian Studies*, Vol.29, No.1. (Feb., 1995), pp.111-139.
- [1997] *A History of Laos*. Cambridge: Cambridge University Press.